



Data

監督: ゴヤー・アクタル

出演: ランヴィール・シン/アーリ
アー・バット/シッターン
ト・チャウルヴェーディー
/カルキ・ケ克蘭/ヴィジ
ヤイ・ラース/ヴィジャイ・
ヴァルマー

👁️👁️ みどころ

萩生田公一文部科学大臣の「身の丈」発言は、何が問題なの？それは、格差と差別を容認するためらしいが、ムンバイにあるダラヴィ地区に比べると？

平等な環境と条件下での競争が望ましいことはわかるが、競争に勝ち抜くにはダラヴィ地区のような格差と差別、そして貧困がかえってバネになる面も。本作の主人公を見ていると、それを痛感！

ゴッサム・シティの格差と貧困の中で育った“ジョーカー”は、「悪の象徴」と化していったが、本作のフリースタイルラップ・バトルに見る主人公のカッコ良さは？その原動力は一体どこに？

本作の鑑賞には、そんな日印比較の視点も不可欠だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■舞台は、あの名作と同じムンバイのスラム街！■□■

第81回アカデミー賞では、イギリス人監督のダニー・ボイルがインドのムンバイのスラム街であるダラヴィ地区を舞台として撮った「ボリウッド」である『スラムドッグ\$ミリオネア』(08年)が「ハリウッド」に大勝！「安い製作費でも、安い出演者でも、企画さえ良ければ・・・」を実証した(『シネマ22』29頁)。しかし、『ガリーボーイ』と題された本作の主人公であるガリーボーイことムラド(ランヴィール・シン)が住んでいるのも、『スラムドッグ\$ミリオネア』の少年たちが住んでいたのと同じムンバイのスラム街ダラヴィ地区だ。都市計画をライフワークにしている私としては、いつまでもこんなスラム街があることに賛成できないが、映画の舞台、映画のネタとしては、そんなスラム街は最適かも？

ちなみに、本作を鑑賞した翌日の10月31日付読売新聞は、日本の著名な建築家、隈研吾氏が東京を歩く隔月企画「東京ミライ」を掲載。今回は、日本を代表する商業地・銀座の路地から、この国が進めていくべきまちづくりのあり方をテーマとした。そこでは、銀座の路地はまるで獣道のように、「道を塞ぐビルの自動ドアを開いて喫茶店を突っ切って通る路地」や、「ビルの中に埋め込まれるように存在する路地」もあるから、「こんな都市構造もあるのかと驚かされる」と書かれている。しかし、ムラドが毎日生活しているムンバイのダラヴィ地区の路地（ガリー）の劣悪ぶりは、そのような銀座の路地とは比べものにならないほどひどい。『スラムドッグ\$ミリオン』は文字通りの“クソ”にまみれたスラム街だったが、本作に見るダラヴィ地区のスラムっぷりは？

■□■ムラドの生活は？恋人は？インドの格差の実態は？■□■

『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズの舞台は、東京タワーの建設に象徴される東京の下町だった（『シネマ9』258頁、『シネマ16』285頁、『シネマ28』142頁）。そして、そこを走る「オート三輪」は今ドキの車に比べるとおもちゃみたいなもので、みんな貧乏だったが、そこで生活する人々はこれから高度経済成長に向かっていく希望で満ちあふれていた。それに対して、ダラヴィ地区で生きる若者ムラドの生活は？

彼は、今の暮らしから抜け出し、成功して貰いたいと願う両親によって大学に通わせてもらっていたが、いつも友人のモイン（ヴィジャイ・ヴァルマー）やサルマンとつるんで、車の窃盗、麻薬取引等に絡んでいた。また、雇われ運転手として働く父親（ヴィジャイ・ラーズ）と母親（アムリター・スパーシュ）、弟、祖母とともに暮す家は狭いうえ、ある日、父親が第二夫人を迎えたことによって、家族の關係に波風が立つことに。これを見ていると、集団就職で青森から東京に来て、鈴木オートで住み込みで働いている六子ちゃん的生活の方がよほどマシだ。

もっとも、そんなムラドに恋人がいたのは立派。しかも、13歳から付き合っている恋人サフィナ（アーリアー・パット）は医学生だ。医師である彼女の父親はダラヴィ地区で診療所を開いており、同じイスラム教徒だが裕福な一家らしい。外科医を目指して医学部に通っているサフィナはムラドとの交際を隠していたが、それはインドに、そしてムンバイのダラヴィ地区に厳然と存在する格差のためだ。

本作導入部では、格差、格差と騒ぐ日本とは比べものにならないほどひどい、インドの格差の実態をしっかりと確認したい。

■□■出会い（1）ラップ歌手MCシェール■□■

“尾張の暴れん坊”だった織田信長が美濃を奪い「天下布武」の野望を持つことができたのは、まむしこと斎藤道三との出会いがポイント。また、私の中国人脈の広がりには、2008年の毛丹青老師との出会いがポイントだ。それと同じように、ムラドにとっては、

ある日、大学のコンサートにやってきたラップ歌手MCシェール（シッターント・チャトゥルヴェーディー）との出会いが、人生の転機になることに。

この時ムラドは、足を骨折した父親に代わって雇われ運転手の仕事に就いていたが、その中で思い知らされたのが、インド社会の“格差”だった。そのため、シェールが魂を込めて歌うラップがムラドの心に響いたわけだが、そこでムラドは「ならば俺も・・・」と仕事の中で鬱屈した気持ちを詞に綴り始めることに。さらに、自分の詞をシェールに歌ってもらおうと差し出すと、シェールからは「お前の言葉をなんで俺が歌うんだ？自分で歌え」と言われたため、ムラドが本気でラップに取り組み始めると、これが意外に面白い……。このようにして、ムラドはシェールの助けを借りてダラヴィ地区の中で「ガリーボーイ（路地裏の少年）」と名乗り、ラッパーとして成長していくことに……。

こんな姿を見ていると、まさにムラドがラッパーとして成長できたのは、シェールとの出会いがポイントになったことが明らかだ。

■□■出会い（2）エリートの女性音楽家スカイ■□■

本作と同じインド映画『シークレット・スーパースター』（17年）では、音楽を楽しむことを禁止する父親の目を盗むため、ブルカで顔を覆い隠して自作自演の曲をギター伴奏で歌うヒロインの姿が印象的だった（『シネマ45』304頁）。彼女の最終目標は、インド最大の音楽祭への出場とそこでの優勝だが、それに向けて、自分の歌をYouTubeにアップしたところ、それが大きな反響を呼び、再生回数が見るみるうちに増えて行った。

それと同じように、シェールの助けを借りて、「ガリーボーイ」ことムラドが、YouTubeに自らが歌う姿をアップすると、たちまち評判を呼ぶことに。それだけなら、ムラドは単に「ダラヴィ地区の人気者」に過ぎないが、そこでスカイ（カルキ・ケ克蘭）から入ってきた伝言に反応したのが、ムラドの第2の転機に。シェールと2人で会ってみると、スカイは若い女性だったが、何と彼女はアメリカのバークリー音楽院で学んだプロのミュージシャン。そんな彼女の申し出はムラドの楽曲をプロデュースしたいということだったから、ムラドはビックリ。スタジオも資金もプロデュースもすべてスカイがやるから、ムラドは詞を作り自ら歌うことだけだ。そんな形で、ムラドのはじめての楽曲『Mere Gully Mein（路地裏が俺の庭）』が世に出ることに。さらに、ムンバイ公演が決まったアメリカのラッパーNAS（ナズ）が前座で歌うラッパーを募集しており、フリースタイルラップ・バトルの優勝者にはその権利が与えられることをスカイから知らされると、もちろんムラドもシェールもそのバトルへの参戦を決意することに。

他方、ここまでムラドの活動が公になると、どこかで父親にバレてしまうのは仕方ない。それは『シークレット・スーパースター』でも同じだった。同作では、ヒロインは何とかその苦境を脱出できたが、さて、ムラドはその苦境をどのように脱出するの？

■□■こりゃ面白い！フリースタイルラップ・バトルに注目！■□■

日本では、二大政党制の重要性が論じられていた時期には国会での「党首討論」が注目されたが、民主党がボシヤリ、安倍晋三総裁率いる自民党の一強多弱体制が続く中、党首討論はいつの間にか影をひそめてしまった。また、国政選挙の直前になると、各テレビ局は政党討論会を企画するが、概ねそれは面白くない。逆に、田原総一朗流の『朝まで生テレビ！』流の討論番組は、パフォーマンスが過ぎる傾向がある。つまり、日本ではアメリカでは普通に見られる候補者選定のための討論（バトル）は容易に実現できないわけだ。それに比べると、本作に見る、「フリースタイルラップ・バトル」は面白い。

ラップ音楽は私も時々聞いたことがあるが、パンフレットによれば、ラップとは「リズムミカルに言葉を発する歌唱法」のことで、ヒップホップとは「ラップ、DJ、グラフィティアート、ブレイクダンス、ファッションなどを含む文化的ムーブメントの総称」らしい。また、パンフレットにある「Who is Gully Boy?」によれば、Naezy と Divine の2人が2015年に「Mere Gully Mein（路地裏が俺の庭）」ではじめてコラボし、彼らの暮し、スラムの実情を綴った歌詞とメロディはインド中で話題となり、曲は「ムンバイ・ラップ・アンセム」と呼ばれるようになったらしい。また、その曲はスラムの問題視されるべき日常をラップにのせて伝え、「ニューヨークでヒップホップが生まれた背景と同じようにして、インドでも本物のヒップホップが生まれた」と、現地のメディア、音楽評論家の間で高く評価されたそうだ。

リズムミカルに歌われているものの、スクリーン上に表示されるラップの歌詞は過激そのもの。日本では、「身の丈に合った」と表現しただけで大臣を辞任しなければならないほど「差別用語」に敏感だから、「ガリーボーイ」の歌詞がどこまで受け入れられるかはわからない。しかし、ラッパーたちが1対1で競う「フリースタイルラップ・バトル」は、いかに相手を口汚く罵ってやっつけるかの勝負だから、その歌詞は過激なものばかりだ。私はこんな「試合」をはじめて本作で観たが、こんな面白い「試合」があることにビックリ！私は、堺正章が司会する音楽番組『THE カラオケ★バトル』が大好きで毎回必ず観ているが、日本でも「フリースタイルラップ・バトル」をやれば、意外に私のような年配者の人気を呼ぶのでは・・・？

■□■「身の丈」発言は何が問題？インドの格差に比べると？■□■

2019年10月末からは第4次安倍晋三内閣（第2次改造）で文部科学大臣に就任した萩生田一が、2020年度から始まる大学入学共通テストで使われる英語民間試験を巡って行った「身の丈」発言が大問題になっている。しかし、「身の丈」発言は一体何が問題なの？また、河野太郎防衛大臣が行った「雨男」発言も問題になっているが、「私は雨男」と軽口を叩いたのがホントに問題なの？

「自分の身の丈に合わせて頑張ってもらえれば」との発言は、「いろいろな環境にある受験生の皆さんに頑張してほしいとの発言」だと萩生田大臣は弁明したが、それは認められず、更に「自分の本意ではないとはいえ結果として受験生に不安を与えてしまった」と陳謝したが、それでもダメで、彼は国会での追及に晒されている。しかし、都市計画、まちづくりをライフワークにしている私は、破綻する再開発問題については、早くから「身の丈再開発」の必要性を訴えてきたから、萩生田大臣の発言とその弁明には複雑な気持ちだ。「身の丈」発言が差別や格差を助長する発言だとしたら、ひょっとして「身の丈再開発」もそれと同じ・・・？また、私は「晴れ男」を常々自慢にしており、北海道でのゴルフは「台風の谷間だったからよかった」などと自慢してきたが、ひょっとしてこれも台風の被災者に対する心ない言葉になるの？そして、私も河野防衛大臣と同じように「不快な思いをされた皆様におわびしたい」と謝罪しなければならないの？

本作冒頭から否応なく見せつけられるムンバイのダラヴィ地区のスラムぶりはそりゃすごい。また、同じ地区に住んでいながら、医師として富裕な生活を送っているサフィナの父親の差別ぶりもすごい。本作は、そんな格差と差別の中で生きているムラドが、ラップに生き甲斐を見出し、そこで必死の努力をすることによって、やっと（自分だけが）格差から抜け出すサクセスストーリーだ。ダラヴィ地区のそんな酷い格差に比べると、今の日本の格差など屁みたいなものでは・・・？私はそう思うのだが・・・。

2019（令和元）年11月6日記